

## 【コラム】伊勢志摩サミットが終わり、産学官連携に想うこと

伊勢志摩サミットが無事に終わりました。このようなイベントの効果が、一過性のものになることは課題の一つです。産学官連携による事業にも同様の課題が見受けられます。それによって得られた成果や効果を上手く活用できていない事例があるかと思えます。例えば、産学官連携によって製品化には成功しましたが、公的研究機関との連携の性質上、「〇〇大学との共同開発」などと積極的に販促活動を実施できないことも一つの課題です。

そこで今回は、その課題解決に関連する特徴的な取り組みを紹介します。それは、【三重大学産学連携認定商品】という制度です。三重大学との共同研究・共同開発の成果に基づいた商品に関して、商品のラベルやチラシ等に、三重大学のロゴ・シンボルマークや「三重大学との共同研究の成果に基づく商品」である旨の表示が可能となる制度です（参考 WEB ページ：<http://www.crc.mie-u.ac.jp/renkeishohin/renkeishouhin.html>）。

認定製品に新型点滴台「カチャット君」があります。これは、三重大学医学部附属病院の現場のニーズから生まれた製品です。始まりは、三重県主催の製品化のニーズを持つ医療従事者と地域企業とのマッチングでした（同様の取組は中部地域で実施され、NPO バイオものづくり中部も支援しています）。その後、共同研究契約を締結し産学連携の研究開発がスタートしました。公的補助金なども活用しつつ、試作品づくり、モニター試験を繰り返して製品化に至りました。産学連携で製品化に至ったものの、これまでに医療分野での実績の無かった開発企業にとって、販売対象となる病院などへ企業単独でのアプローチは難しい状況でした。よって、その製品が大学附属病院との連携の成果であることの PR は重要な要素と考えられました。そこで、【三重大学産学連携認定商品】制度の活用になりました。この制度を活用することで、パフレットなどの販促材料に、本製品が大学との共同研究の成果である旨を明記できます。さらには、三重大学としても積極的な情報発信が可能となりました。公的機関との連携を全面的に PR でき、開発製品の信頼性の提供に繋がりました。その結果、製品の販売対象となる医療機関や関係商社へのアプローチがし易くなり、現在は製品の改良をしながら販路を広げていく次の段階へと移行しています。この事例は、産学連携による研究開発を実施し、加えて上記制度を上手く活用して販路開拓を推進しています。

今後、産学連携、その中でも特に地域貢献が求められる地方大学と域内企業との連携は活発になると想定されます。その際に、産学連携をすることが目的とならないよう、上記事例のように上手くプロジェクトを進めていく必要があると思います。

その他、三重大学産学連携認定商品には、地ビール「ヒメホホワイト」から医療機器、工法まで幅広い分野になっています。機能性を有した「飴」など“お菓子”もあります。ぜひ一度、上記 WEB ページをご覧ください。ご参考になれば幸いです。

“お菓子”と言えば、三重県では来年の 4 月に第 27 回全国菓子博覧会が開催されます（WEB ページ：<http://www.kashihaku-mie.jp/>）。この博覧会は 4 年に 1 回の開催となる伝統のある全国規模のイベントです。三重県ではサミットに続き大きなイベントですが、その

効果が一過性のものにならないよう、関係部署や団体などが連携し、継続した地域経済の活性化に繋げて欲しいと願っています。

NPOバイオものづくり中部アドバイザー 加藤 貴也  
(三重大学社会連携研究センター助教)